

## 特集

輝く先輩方からのメッセージ

## 中山 俊宏 さん



## プロフィール

1986年卒。青山学院大学国際政治経済学部国際政治学科卒業。現在、慶応義塾大学総合政策学部教授。専門は現代アメリカ政治・外交、日米関係、国際政治。メディアへの出演など幅広く活躍中。著書に「介入するアメリカ——理念国家の世界観」など。

## 高等部は人生の羅針盤が形成される空間

青山学院高等部に入ろうと思ったのは、ミッション系かつ自由な雰囲気になれたから。また小学校の時、父の仕事の都合でN.Yに五年ほど住んでいたことから、英語の強い高校で勉強したい思いが強かったからです。

二年生の時、英語をブラッシュアップするため、青学が提携するインターナショナルフェローシップのプログラムでアメリカに留学。一年間、サウスダコタ州ウォータータウン高校二年生に編入し、卒業。青学高等部二年生に戻りましたので、合計で四年間、在籍した計算になります。

当時の私は、とにかく沢山の本を読みました。文学から始まり、様々な歴史書、哲学書。「誰も知らないことを知ってやろう」——それは衝動のようなもので、およそ体系的な学びではなく、吸収することそれ自体が目的だったと思います。

そんな中、ある数学の先生の持つ世界観に惹かれたことがあります。その先生は数字の「ゼロ」について語り始めることと止まらなくなってしまう方で、私は彼の中に「孤独な探究心」を見ました。そしてある日、英検一級に合格した際、私は壇上でスピーチをすることに。この時、原稿を見てもらったのは担任でも英語の先生でもなく、件の数学の先生でした。「世界について知りたい」想いが共鳴し、精神的な信頼感を感じて、重要な場面で頼ってみたいくなったのだと思います。

卒業後は大学、大学院へと進学し、ワシントン・ポスト紙の極東総局記者に。その後、日本政府国連代表部の専門調査員、日本国際問題研究所主任研究員を務め、現在に至ります。

今思えば、高等部時代は自分の生きる羅針盤のようなものが形成された時期。人の一番コアな部分が出来る時期にも思えます。自分で自分を探る意図がある人にとって、高等部は、自分の個性を開花させることができる空間なのではないでしょうか。自分が人と違うことを恐れず、一歩踏み出す勇気を持ってください。そして、掛け替えのない三年間を送ってもらえたらうれしく思います。

## 小川 彩佳 さん



## プロフィール

2003年卒。青山学院大学国際政治経済学部国際政治学科卒業。07年にテレビ朝日へ入社し、アナウンサーに。同局「やじうまプラス」や「スーパーJチャンネル」のフィールドキャスターを経て、現在は「報道ステーション」3代目サブキャスターを担当。

## 宝物のような時間がきっとそこにあるはず

高等部時代を振り返った時、いつも思い出されるのはミュージックフェスティバルについてです。

同イベントは、生徒たちによるバンドが対バン形式で演奏するフェスティバル。音楽が大好きな私は、ステージ上で輝く皆さんと、ステージが与えるワクワクに、一気に心を奪われていました。

私は早速、その運営を担う生徒会「集会委員会」の門を叩きました。そして二年生の時、イベント全体をプロデュースする委員長を任されたのですが、ストレスから盲腸に…。高等部は個性を尊重する校風。中でもステージに上がらんとする人は特に個性が強い方ばかりだったので。ところがカーテンコールの際、そんな彼らが「一番頑張ったのは小川さん」と、私を舞台上に上げてくれたのです。改めて素敵なイベントだと思いました。そして、それを作ったのが彼らの個性であり、高等部の校風だと感じました。

文化祭も思い出深いですね。私たちのクラスは男女とも仲がよく、自由にアイデアが飛び交う光景も見られました。三輪車に風船を3つ付けた「マリオカート」は今もいい笑話です(笑)。

現在、私はテレビ朝日でアナウンサーを務めています。ミュージックフェスティバルの経験は今の仕事にも通じていて、最終的に放送に至るまでに関わる多くの人たちに思いを馳せながら、渡ってきたバトンを送るにのせる「アンカー」のような気持ちで取り組んでいます。自然にオープンに人と接する姿勢は高校時代に身につけたもので、当時の同級生には今も助けられています。鎧も何も身につけていない自分の姿がそこにあり、そんな私を受け入れてくれる当時の仲間がいる場所は、自分が戻れる場所にもなっていると感じます。

人生の楽しい記憶や幸せな記憶には更新されていくものもありますが、10代半ばの感性で高等部で経験したことは上書きされず、別フォルダとして記憶に残るはず。宝物のような時間が、きっとそこにはある。皆さんにも、勿論勉強も頑張りつつ、自分がやりたいことを気持ちの赴くまま追いかけていって欲しいと思います。

## 中村 武彦 さん



## プロフィール

1995年卒。青山学院大学法学部卒業後、NECに入社。マサチューセッツ州立大学アマースト校のビジネススクール・スポーツマネジメント修士課程に入学、卒業。スペインISDE法科学院に入学、卒業。MLS、FCバルセロナなどの国際部を経て、現「ブルーユナイテッド社(www.blueutd.com)」CEO、日本サッカーと米国サッカーの架け橋になることを根本姿勢に執筆活動など様々な分野で活躍中。

Photo Credit : Junko Ohira

自由な環境で育まれた  
「自分はどうしたいのか」という発想

青山学院高等部時代は、視野や興味を広げ始め、価値観が大きく変わった時期でした。渋谷と言う立地、様々な背景を持つ刺激的なクラスメートたちとの出会い。先輩後輩の関係もフランクで、服装も考え方も自由な校風を通して、発想や考え方が縛られたりすることなく、「自分はどうしたいのか」という考えがこの頃、芽生え始めたのです。

それまで私は、ある種の「優等生」でした。中学校ではサッカーの強豪校に在籍しており、全国大会にも出場しました。本校以外の有名高校に合格する程には勉強もしていました。ですが、「自分はどうしたいのか」という発想が私に宿り、私の人生は変わっていったように思います。当然、私だけのことではありません。実際、当時の同窓生でユニークな人生を歩んでいる方は多くいます。

大学卒業後は何をしたいのかよく分からないながらも、10歳までアメリカで育った帰国子女だったので、海外と接点を持つ仕事に就くべく、日本電気(NEC)海外事業本部・北米営業部に就職。ですが「もっと興味のあることを仕事に」と考えるようになり、「真剣にプレーをしてきたサッカーであれば一生かけてやりたいことであるし、誰にも負けない。また生まれ育ったアメリカで働きたい」との想いから、アメリカの大学院でスポーツマネジメントを、そしてスペインの大学院でスポーツ法を学び、日本人として初めてメジャーリーグサッカー(MLS)やFCバルセロナ勤務を経て、15年に独立起業。コロンビア大学招待講師、青山学院大学地球社会共生学部非常勤講師を務めたり、Jリーグなどの海外進出を支援するコンサルティングに従事しています。

このように、想いや価値観は年を経ることに変遷していくもの。皆さんの五年後、十年後も今の想像と違っていると思います。ですがそれは成長の証なのです。また、変化し続ける価値観に沿うには、やはり柔軟性が不可欠になります。私の場合は、高等部の自由な校風がその根幹を成してくれているのではないかと。今もそう考えています。